

第三十四回

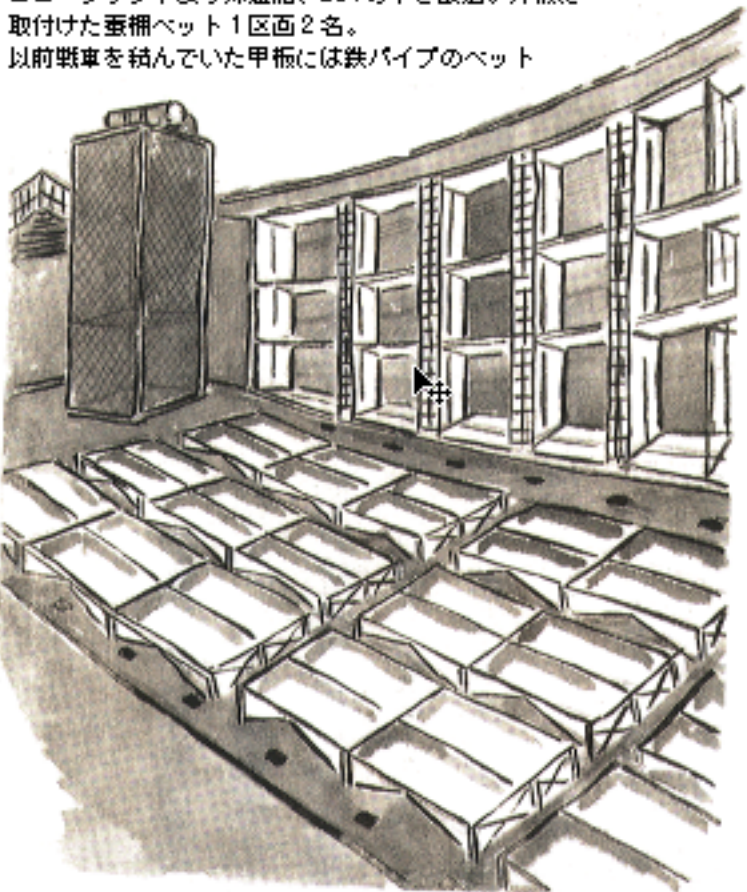
十二月三十一日の夜だったと思う。

ウェリントン港から三隻の(LST)上陸用舟艇に分かれて乗せられた。

船は箱船のようにならなっていて、戦争中は戦車を積み込んでいる船底のようにならな
ずらりとベットが並んでいた。両側にも蚕棚のようになつたベットがあつた。便所はエレベ
ーターで甲板へ上がり、船の軸先にあつた。シャワーもあつた。

船は米軍の管轄だつた。

ニュージーランドより帰還船、LSTの中を改造。外板に
取付けた蚕棚ベット1区画2名。
以前戦車を積んでいた甲板には鉄パイプのベット



日本はどうなつたのかわれわれはこれからご入連れていかれ、どうされるのかの説明
がないまま船は動き出した。また日露戦争の時の捕虜は終身労働をさせられた話が出た
り、日本へ引き渡され浦賀に上つた後、敵の捕虜になつたという罪で、どこか入連れていかれ
るのだ、などと言出す者もいたりして、しだいに不安が募つていった。

食事はすべて缶詰、たまご焼き、チーズも缶詰であった。チーズ缶は臭くて日本人にはあわなかった。海へ投げ捨てる者もいた。以後、私は捨てるくらいならと、貰ったり、ほかのものに代えたりしていくつも古い靴下に詰め込んだ。もし本当に家に帰れたら、なんの土産もないのだから、せめてもの記念品、手土産にしようと思った。

食器、水筒、これは大きいので湯たんぽにも使えた。靴はユージーランドの編上げを、一足予備に持っていた。使いふるしの毛布、継ぎはぎだらけの外套も持ってきていた。

船の中ではなにもすることがなく、暇と不安とで苛立つばかりだった。

敵を困らせてやるうと、張り巡らされている電話線を切るいたずらをなんどもした。島だ！という声に海上を見ると、雲だ！ということが何度もあった。

最初に見た島はグアム島らしく、大分日本に近づいてきた。ここで二、三日停泊した。

三隻目のLST舟艇が横波をくらうて船にひびが入り、新しい船に乗り換えた程度のことではあったが、大したこともなく順調に航海がつつき、すでに三十日以上がたった。

赤道直下を離れ、北上するにつれて気温がどんどん下がってきて、詰め込んできた下着を何枚も重ね着した。

星条旗

気温がますます低くなり、収容所で着ていた衣服まで着込んだ。

いよいよ日本へ近付いていることを肌で感じた。

小笠原諸島の父島へ着いたとき、ここは日本領土のはずなのに星条旗が翩翩へんぼんとひるがえっているのだ。これはどういふことだと騒いだ。が、米軍は何も答えなかった。

船が入った浦賀港にも、いたるところに星条旗がひるがえっていた。

出迎えにきたタルマ船の船頭にとっしてなのかと尋ねた。

日本は、無条件降伏したのだ」と、初めてここで聞かされたのだ。

しかし、無条件降伏の意味が、咄嗟に理解出来なかった。誰も急に黙り込んでしまった。われわれは一体これからどうされるのか、日本軍から「生きて虜囚の恥」を罰せられるのか？不安でたまらなかった。

その頃の復員船の兵隊は、食料不足で体が衰弱しているのがほとんどで、担架や人の肩をかりなければならぬ者が多かったそうだ。がわれわれは人一倍元気で、体力があり、自力で大きな荷物を担いでタムク船に移った。しかも菱形のつぎの当った服装が異様である。

船頭さんに不思議がらね、兵隊さんどこから帰ってこられた？」と聞かれた。

つづく

次回第三十五回は八月三日(火)の予定